論　　考

上杉鷹山は
これまで、どのように
評価されてきたか？

（株）T･M･D･グループ
代表取締役

上　床　訓　弘

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

内　容　項　目

１　昭和20年（1945）までの、高い評価
２　内村鑑三の評価した鷹山
３　新渡戸稲造の評価した鷹山
４　歴史上の人物の否定、等閑視と、再評価
５　山本七平氏の鈴木正三論
６　さらに七平氏の、石田梅岩論
７　石田梅岩から上杉鷹山へ

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

１　昭和20年（1945）までの高い評価

上杉鷹山（ようざん）は、宝暦元年（1751）7月20日に生まれ、文政5年（1822）3月12日、満年齢70歳で死去した。
上杉謙信から数えて第10代目の上杉家の家長で、米沢藩の藩主であった。
江戸時代、中・後期の名君の一人である。

彼は、日向国（現、宮崎県）高鍋藩3万石の藩主、秋月種美（たねみつ）の次男として生まれた。宝暦10年（1760）6月、米沢藩主、上杉重定に当時、嗣子（ししー跡継ぎの子）がなかったため、その養嗣子（ようしし―跡継ぎのための養子）として迎えられた。上杉家と母方で血のつながる親戚だった関係である。

彼は、元服して名を治憲（はるのり）と改めた。鷹山という名は、奥羽の大鷹山、白鷹山といった山の名にちなんで、晩年に自らつけた号である。従って厳密には治憲と呼ぶべきなのだが、一般に鷹山といわれているので、ここでもこれを通したい。
さて、彼は明和4年（1767）4月、満年齢15歳で藩主の座を引き継いだ。
藩主となった鷹山には、大きな課題が待ち構えていた。膨大な金額の累積した藩の財政赤字と、藩士、藩民全体の士気の衰退、土地、田畑の極度の荒廃である。
彼は藩士、藩民を鼓舞し、彼らを巻き込み、自らも率先して改革を進めていった。
しかし明和、安永期の、いわゆる前期の改革は失敗に終わった。さらに天明年間、すさまじい大飢饉に見舞われて、改革は完全に途絶した。
やがて寛政年間から、後期の改革をスタートさせることができた。これはその後かなり長い年月がかかったが、継続的に進めることができ、これによって改革は成功した。
これらの過程で、実にさまざまな事件や問題に遭遇している。これらをかろうじて克服、解決して、彼は改革を完成することができた。

この上杉鷹山について、これまでわが国で、どのように評価されてきたのか？

鷹山への評価は、時代の流れの中で、大きく変遷してきている。

昭和20年（1945）8月までの高い評価と、その後の否定、等閑視。さらに昭和50年（1975）以降の再評価と、大きく３つに区分することができる。

江戸時代後期、鷹山の名は日本全国にかなり広く知られていた。

幕府の寛政の改革を執行した、老中、松平定信から、鷹山は米沢藩の治政の秀逸さを高く評価され、直接に表彰されている。また、鷹山の死後、天保7年（1836）、上杉家第12代家長、斉定(なりさだ)は、鷹山、治廣(はるひろ)、斉定と、３代にわたる米沢藩の善政を、時の将軍、家斉から褒賞されている。

当時の儒学者たちがこれに注目し、このことを広く喧伝(けんでん)したのである。これによって、全国諸藩の大名や有識者たちに、鷹山の名は広く知られることとなった。

明治期、鷹山の事績や人となりについて、さまざまな書籍が出版されるようになった。さらに大正、昭和になり、昭和20年までこの状態は続き、主要な単行本だけでも30、40冊が刊行されたといわれている。

この間、鷹山の名は日本国内だけでなく、海外へも紹介され、知られるようになった。

最初のものは、内村鑑三が英文で執筆し、明治27年（1894）に出版した「日本及び日本人」である。

この中で鑑三は鷹山を取り上げて、彼自身の洞察を加えながら、高い評価を与えている。

この書はその後、ドイツ語、デンマーク語に翻訳され、多くの読者を得て増刷された。

明治41年（1908）に、この書は「代表的日本人」と改題された。これもよく読まれ、再版、改版がなされている。極め

て多くの欧米人に読まれた証拠である。

もう１つは新渡戸稲造が同じく英文で著した「武士道」という書物である。この中で稲造も、鷹山を高く評価している。

この書は明治32年（1899）、アメリカのフィラデルフィアで出版された。これもすぐにドイツ語、ポーランド語などに翻訳され、いずれも増刷されている。

ところで、明治政府は明治13年（1890）に、教育勅語を公布した。わが国の教育の基本的な方針として、これを打ち出したのだ。これに沿って全国の学校教育の展開を方向づけることとした。

とりわけ修身の科目を、教育の中心ととらえた。その修身の教科書の中に、鷹山は登場することになった。教育勅語の中で求められている徳目を、鷹山が典型的な形で兼ね備えた人物だと評価されたのだ。

「倹約につとめよ」「産業を興(おこ)せ」「志を堅(かた)くせよ」「先生をうやまへ」といった項目で、鷹山はその人格と業績をとり上げられている。

ともかくわが国が終戦を迎えるまで、初等・中等教育を受けた世代は、上杉鷹山の名前を知らない者はいなかった。

私の母は鹿児島県の地方農山村で生まれ育っている。その母が私の幼い頃、教えてくれた。

「江戸時代、東北のあるところに上杉鷹山という立派な殿様がいてね、“なせばなる、なさねばならぬ、なにごとも、ならぬは人の、なさぬなりけり”といったんだよ！」

子供の心にこの言葉は深く刻まれたものである。このような地方にまで、その名は広がっていた。

２　内村鑑三の評価した鷹山

鑑三は鷹山をどうとらえていたのかを、まず見ておきたい。

彼は「代表的日本人」の中で、西郷隆盛―新日本の建設者、上杉鷹山―封建領主、二宮尊徳―農民聖人、中江藤樹―村落

教師、日蓮上人―仏教僧侶の５人を取り上げた。
　これら歴史上の人物について、独自の解釈、洞察を加えつつ、この５人がいかに代表的な存在であったかを論じている。

　さて、鷹山をとり上げるについての、彼の基本認識は以下の通りである。
　「（略）勿論（もちろん）、圧制政治は総（すべ）ての種類を、余輩（わがはい）は嫌悪し且（か）つ憎悪する。（略）人類の悩んできた二種類の圧制政治、即ち専制的な圧制政治と投票箱の圧制政治とのうち、後者は二つの悪のうちのより少なき悪たるに過ぎない。そしてそれ以上の何者でもない、と余輩は言ふのである。
　（略）封建制度にいろいろの欠陥があった。そしてそれらの欠陥のために、我々は封建制度を立憲制度に換（か）へたのである。しかし鼠（ねずみ）を焼かうとした火は、納屋をも焼きはしなかったか、封建制度とともにそれに結びついていた忠義、武勇、多量の雄々しさや人情味が我々より喪（うしな）はれはしなかったかを、我々は惧（おそ）れるのである。純粋の意味の忠義は、主君と臣下とが相互に直接、相接（あいせっ）している時にのみ、可能である。
　（略）我に仕（つか）ふべき主君のある時、あるひは我に慈（いつく）しむべき臣下のある時、自己犠牲と其の凡（すべ）ての美しさが現れるのである」

　鑑三はこのようにとらえて、鷹山が家臣、藩民たちと直接、相接する関係をたえず拡げ、深めていったことを確認した。これを基礎として、真の忠義や自己犠牲の精神がはぐくまれ、米沢藩の改革が展開されていったことを大きく評価していた。

　さらに次のような指摘を行っている。
　「凡（あら）ゆる人間のうちにて、恐らく鷹山は欠点や弱さを数へ上げらるる必要の最も少ない人であらう。彼は如何なる伝記者も多分意識し得ないほど、自分の欠点や弱さを自ら意識していたからである。彼は人といふ言葉の完全な意味に於ける人であった。弱き人であればこそ、責任の地位に就くに

際し、神社に誓詞を奉納するのである。彼と彼の藩に危機の迫った時、彼を鎮守の神に逐(お)ひ遣(や)ったものは、然(こ)う言って差支(さしつか)へなければ、彼の弱さであった」

誓詞とは、鷹山が明和4年（1767）に藩主の座を引き継いだ際、一人の家臣に使いを命じ、他の誰にも知られることなく、国元、米沢の春日神社と白子神社に納めた文書である。彼は自分の命を懸けて、藩の改革を成就することを神に誓った。これらの神社は、上杉謙信をはじめとする上杉家の祖神たちを祀っていた。

鷹山のこの誓詞のうち、白子神社に奉納したものの現物が残っている。白子神社は明治年間になって火災にあった。神殿の奥の焼け残った木箱の中から出てきたものがそれであったという。以下はその内容である。

「連年、国家衰微し、民人あい泥み（なずみ―ひどく苦しんでいる状態）候。よって大倹（たいけん―徹底して行う倹約）あい行い、中興つかまつりたく、祈願つかまつり候。この決断、若（も）し怠慢つかまつるにおいては、ただちに神罰を蒙（こうむ）り、我が家運永久に尽くべきもの也」（読みくだし文―筆者）

原文は漢文で書かれており、見事な楷書の字である。しかも凛とした気魄があふれている。その文書の左下に花押（かおう―当時のサイン）が記されており、彼が書いた現物に間違いがない。ともかく満１５歳の少年の、一途な、まさに真剣さが感じられる。

また、鎮守の神の件は、安永2年（1773）の７名の重臣たちの叛乱の時、および天明4年（1784）の大飢饉の時、藩を守護する神々を祀っている鎮守の杜(もり)に一人で籠って、藩と藩民全体の安寧を断食して祈ったことをさしている。

鑑三は鷹山のその弱さが結局は強さになったというのだ。しかもそれが転化しえたのは、彼自身が極めて的確に自己理解、自己洞察していたからだというのである。それゆえ、鷹山が「人といふ言葉の完全な意味に於ける人であった」と、鑑三は言い切った。

確かに鷹山が「強い人」であったなら、米沢藩の藩政改革は実現できなかっただろう。

三河国岡崎藩に水野忠辰(ただとき)という若くて優秀な藩主がいた。彼も藩政改革に打ち込んでいったが、結局は頑迷固陋(がんめいころう)な重臣たちにつぶされた。改革は頓挫し、彼は座敷牢へ押し込めにされ、その中で狂い死にしてしまった。
忠辰は徳川家康と血のつながりのある水野家の直系の長男として生まれた。幼いころから聡明で、鷹山と同様若くして藩主の座を受け継いで、財政が逼迫していた藩の改革に乗り出していった。
当初のその改革は効を奏して大きな成果を出した。しかし、改革に反発する藩の重臣たちとの軋轢が生じ、それが大きな対立となった。
これに対して忠辰は、力でこれを抑え込もうとした。重臣たちも結束を固くして、力でこれに対抗してきた。忠辰はさらに力でこれを打開しようとした。しかしやがて重臣たちの力に負けてしまった。座敷牢の中で精神的におかしくなり、やがて宝暦2年(1752)8月、その中で死んだ。満年齢28歳であった。
これは鷹山が生まれた翌年である。

忠辰は自分の強さしか知らなかった。その力をもって解決できると考えて突き進んだ。しかし結局、相手の力に負けてしまった。
この忠辰と鷹山との対比をしつつ、私はいつもこういっている。
「自分の強さだけしか知らない者は弱い。自分の弱さを真に識る者は強い」

３　新渡戸稲造の評価した鷹山

新渡戸稲造の著述した「武士道」は、「日本の魂―日本思想の解明」という副題がついている。この中で稲造は、道徳体

系としての武士道、さらに武士道の淵源を説いた上で、義、勇、仁、礼、誠、名誉、忠義、克己などの意味を、章を分けて記述している。
　そして第５章「仁・惻隠（そくいん）の心」の中で、彼は鷹山について書いている。ちなみに惻隠とは、憐れみを垂れること、いたわしく思うことである。

「孔子も孟子も、人を治むる者の最高の必要条件は、仁に存することを繰り返した。
　孔子曰く“君子はまず徳を慎む、徳有ればこれ人有り、人有ればこれ土有り、土有ればこれ財有り、財有ればこれ用有り、徳は本也(なり)、財は末也”(大学)と。
　また曰く“上仁を好みて下義を好まざる者、いまだ有らざる也”(大学)と。孟子はこれを祖述して曰く“不仁にして国を得る者これ有り、不仁にして天下を得る者はいまだこれ有らざる也”と。
　また曰く“天下心服せずして王たる者は、いまだこれ有らざる也”と。
　（中略）封建制の政治は武断主義に堕落しやすい。その下において最悪の種類の専制から吾人(ごじん―われわれ)を救いしものは仁であった」
　稲造は、為政者の根本部分に「仁」がなければ、最悪の種類の専制になってしまうと説いている。鷹山にはその根本に「仁」があったことをいっているのだ。

　稲造はこれに続けていっている。
　「私は如何なる種類の専制政治をも支持するものでは断じてない。しかしながら封建制を専制政治と同一視するのは誤謬(ごびゅう)である。フレデリック大帝が“王は国家の第一の召使いである”といいし言をもって、自由発達の一新時代が来たと、法律学者たちの評したことは正しい。
　不思議にもこれと時を同じくして、東北日本の僻地において、米沢の上杉鷹山は正確に同一の宣言をなし――国家人民のために立てたる君にして、君のために立てたる国家人民にはこれなく候――封建制の決して暴虐圧制にあらざることを

示した。封建君主は臣下に対して相互的義務を負うとは考えなかったが、自己の祖先ならびに天に対して高き責任感を有した。彼は民の父であり、民は天より保護を委（ゆだ）ねられたる子であった」

鷹山の「宣言」というのは、明和5年（1785）に彼が藩主の座を、第11代の治廣に引き継ぐ際に手渡した、藩主としての心得の中に書いた言葉である。これは後々、「伝国の辞」と呼ばれている。

この文書は藩主の座を引き継ぐ際に、代々受け渡されていき、その現物が今日残っている。就封時の神への誓詞と異なり、この書体は極めてまろやかで達筆である。鷹山の人格的な成長を感じることができる。

この「伝国の辞」の内容は、三ヵ条からなっており、稲造がとりあげているのはその最後の項目である。

その前の項目は以下の二つである。

「一、国家は先祖より子孫へ伝え候国家にして、我私（われわたくし）すべきものにはこれなく候。

一、人民は国家に属したる人民にして、我私すべきものにはこれなく候」

鷹山はこの文書の最後、左端に次の言葉を書き入れている。

「右三条、御遺念あるまじく候こと」

稲造はこの彼の思想を高く評価し、それが専制君主制とは全く異なることを論証したかったのである。

21世紀の現代においても、このような思想を全く理解できていない国家があり、元首がいる。国家の経済は殆ど破綻し、特権階級以外の国民全体は、極度に生活窮迫の状態に陥っている。元首とその取りまきの特権階級は、その状況を一顧だにしていない。

しかもその元首の座は世襲されてゆく。

遅かれ早かれこの国は歴史的な大審判を受けるはずだ。

とにかく鷹山の時代から歴史は流れて、既に約230年もたっているのである。

４　歴史上の人物の否定、等閑視と、再評価

昭和20年（1945）8月15日、わが国は太平洋戦争（大東亜戦争）に敗れた。

それまでの価値体系は全て否定され、いわゆる民主主義の名のもとに、旧来の「思想」も「しくみ」も「しかけ」も、ことごとくくつがえされた。

その典型は当然、政治と教育の分野である。

教育の分野で、修身の科目は全て削除され、その中に登場していた人物は殆ど抹殺されてしまった。

鷹山も非民主的人物ととらえられたのである。詳細な検証など殆どなされないままに、否定された。

この時、鷹山以上に否定された人物が、二宮尊徳である。尊徳はその幼名、金次郎。終戦時まで、全国の小学校の校庭に銅像もしくは石像として建てられ、顕彰されていた。たきぎを背負って、書物を読みながら歩いている姿である。

昭和27年（1952）4月まで日本を占領統治したG･H･Q（連合国軍最高司令部）は、これらを一切、撤去させたのだ。

尊徳は、逼迫し破綻しかかった農村や藩から要請されてそこにおもむき、改革を進めてさまざまな成果を上げていった。その説くところは、一人ひとりが私利私欲を捨てて、経済と道徳を統合する努力をし、皆が豊かに生きてゆける道を開こうということであった。

これらのどこが非民主的なのか？

総司令官、マッカーサー以下、総司令部の担当官たちの、「坊主憎けりゃ、袈裟（けさ）まで憎い」という心理が働いたとしか言いようがない。

「戦前戦中、これほど高く推奨されてきた人物たちだから、ともかく抹消せよ」といった短絡的意思決定だったわけだ。「日本人に対する“骨抜き”政策」の強行であった。

このような状態で年月がたった。

さて、評論家の大和雄三氏が紹介したといわれている、今

日ではあまりにも有名なエピソードがある。
　昭和36年（1961）、アメリカの第35代大統領、J･F･ケネディーが就任した時のことである。会見した日本人記者団が、大統領に質問した。「大統領閣下が最も尊敬なさっている日本人を、一人あげるとすればそれは誰でしょうか？」
　ケネディーは即座に答えたという。
　「それは、ヨウザン・ウエスギです」
　記者たちの中に、ヨウザン・ウエスギを知っている者は一人もいなかったという。
　一人もいなかったというのは、若干、誇張ではないかと感じる。敗戦から16年しかたっていない。しかしこのエピソードが多くの人に説得力を持つほど、鷹山が等閑視されていたのは事実である。
　ところでケネディーが、なぜ鷹山を知っていたのか？
　それは、先にあげた鑑三の「代表的日本人」と稲造の「武士道」を、彼が読んでいたからだといわれている。彼はこの２冊をかなり深く読みこなしていたようである。

　昭和40年（1965）ごろから、鷹山についての専門書や郷土史書が出され始めてきている。まとまったものとして、昭和43年（1968）に横山昭男氏が「上杉鷹山」（吉川弘文館）を出している。しかしこれは専門書であって、まだ限定的なものだったのではなかろうか。

　昭和50年（1975）頃から、鷹山についての再評価が大きくなされるようになった。
　昭和50年にＮＨＫが、総合テレビの「日本史探訪」という番組で、鷹山をとり上げた。
　さらに昭和54年（1979）、山本七平氏が「日本資本主義の精神」（新書版、光文社）を出し、この中で鷹山を高く評価した。
　私自身、この書で強く動機づけられ、それ以降「上杉鷹山研究」に突き進むことになった。彼のこの本はその５年後に、文庫本として、同社から出版されている。
　昭和58年（1983）に作家の童門冬二氏が、「小説・上杉鷹

山」上、下（学陽書房）を出した。これは販売部数を大きく伸ばしたという。しかし小説と銘打っている通り、かなりフィクションが加わっている。しかもその内容は、失敗した前期の改革の段階で終わっている。私はむしろ、改革が途絶したプロセスと、再開した後期の改革が重要だととらえている。この書ではこれらの部分について全く触れていない。

さらに平成元年（1989）に横山昭男氏の編・著による「上杉鷹山のすべて」（新人物往来社）が出版された。9名の執筆者が分担して、鷹山の人物像や業績、彼を取り巻く家臣、藩民たちのことなどを、さまざまな角度からとらえ、分析している。

これらの他にも実に多くの書籍が出版されている。当時、一大ブームとなった。

これらを通じて、鷹山の事績を研究すればするほど、そこには今日の状況の中で、われわれが「温故知新」すべきことがらが多々あることを感じている。

５　山本七平氏の鈴木正三論

鷹山について書かれたものの中で、先ほどあげた山本七平氏の「日本資本主義の精神」は、その視点のすばらしさ、洞察の的確さで、抜きんでたものだと私はとらえている。

七平氏は「なぜ一所懸命に働くのか」
という副題をつけて、このことについての現代日本の状況を解明しようとしている。

「江戸時代は、日本の歴史の中で最も興味深い時代である。というのは、一言でいえば、これは“日本人の自前の秩序”を確立した時代であり、それが300年近く継続した時代であるからである」
と、彼は位置づけている。

そして、現代日本のこの精神的、社会的構造が形成されたのは、この徳川期であったとしているのだ。

「日本は、共同体と機能集団、または血縁の原理と組織の

原理という形で、分化していない社会である。いわば血縁を一つのイデオロギーにして、実際は血縁関係にないものを、擬制の血縁関係で統制してきた社会であった。そして、長い戦乱と混乱を経て、これが一つの社会秩序として完成したのが、だいたい徳川時代であり、この社会構造に対応している精神構造も、この時代に形成された」
と、とらえている。

　このような血縁的イデオロギーの社会では、「契約の論理」ではなく「話し合いの論理」が中心となっていった。
　しかもこれら血縁的集団が機能的集団として効果を発揮していくこととなったその根底には、当時、二人の思想家の存在があったことを、七平氏は指摘した。
　一人は鈴木正三(しょうさん)であり、一人は石田梅岩(ばいがん)である。そしてこの２人の思想の流れの行き着いたところに、鷹山がいるというのである。

　鈴木正三は天正7年(1579)に、三河国東賀茂郡で生まれた。徳川家康、秀忠に仕えてさまざまな戦に出て、武勲を立てている。また、島原の乱にも従軍した。
　その後剃髪して仏教を学び、修行に励んだ。
　正三は一般に禅学者として知られている。しかし彼は、仮名草子の作者としても著名であったという。
　正三は明暦元年(1655)に、76歳で死去した。ちなみにこれは、鷹山が生まれる約100年前である。

　この正三の思想を、七平氏は次のようにまとめている。
　「正三は、日々の業務の中に宗教性を求めることに、解決を見出そうとしたといえる。農業は仏行であり、一心不乱に行えばそれは自らを成仏させるだけでなく、社会を浄化しうるのである。職人が一心に働けば、品々が出回り、世のため人のためになる。これも仏の徳用であり、それを行っている者は、ありがたき仏性を具有しているのである。
　商人が需要と供給の間をつなげば、それは世の人を豊かにし自由にし、同時に自らも成仏できるのである。

この発想はまことにユニークなものだが、もとを探ればやはり禅から来たものであろう。当時、武士に“剣禅一如（いちにょ）”といった考え方があった。一心不乱に剣術を学ぶのは、“殺し屋”になるためなのではなく、禅の修行と同じであるという考え方である。この考え方を農工商の３つに拡げれば、農民が一心不乱に田畑を耕すのも禅の修行であり、職人が一心不乱にノミを振るうのも修行であり、商人のあきないも修行でありうる。

そのように修行として自己の職業を遂行し全うすること、すなわち“世法を即仏法になし給へ”というのが彼の念願であった」

これはいわゆる「万民徳用の思想」と呼ばれているものである。

この正三の思想をさらに発展させたのが、石田梅岩であったと七平氏は説いた。

６　さらに七平氏の、石田梅岩論

石田梅岩は、正三の死後30年が経過した貞享2年（1685）に、丹波国桑田郡で生まれた。12歳で京都に奉公に出たが数年で帰郷し、その後再び上京した。そして呉服商に奉公しながら読書に努めた。

35歳ごろから、それまでいだいていた本質的な疑問を解決するために師を求め、小栗了雲という学者に出会い、大いに啓発された。

享保14年（1729）、44歳の時主家を辞して京都車屋町の自宅で、心学の塾を始めた。

梅岩の思想は、当時の町人層に広く歓迎され、門弟は400名を数えたといわれている。さらにこの後、商人だけではなく、武士層にも広がっていった。

やがて延享元年（1744）、彼は59歳で死去した。これは鷹

山が生まれる７年前である。

さて、七平氏がとらえる梅岩の思想のポイントは、以下の通りである。

「梅岩のころの商家は、すでに一つの営業体であり、組織であった。同時にそれは利潤獲得を目指して機能している有力な階級であった。その実力は“外見には日本中武家の所領なれど、その内実は商家の所領なり”という状態になっていた。それでいながら商人は、当時の社会秩序の中で、一種、反社会的な存在と見られていたことは否定できない。

梅岩はこれを当時の社会の中で、正当に位置づけようとして、その基本を求めたといえる。そして彼は、これを士農工商に共通する一つの基本的な“道”に求め、内にはその励行を説くとともに、外には一種の“市民権”を主張したわけである。

いわば“商人の道といえども、何ぞ士農工の道に替わることあらんや。孟子も、道は一つなりとのたまふ。士農工商とも天の一物なり。天に二つの道あらんや”というわけである。梅岩はその基本を求めたのであった」

さらに梅岩はいったという。

「商人の売買するは天下の相なり。（略）天下万民、産業なくして何をもって立つべきや。商人の売利も、天下、御免（おんゆるし）の禄(ろく)なり」

しかしそのために、そこには「欲心」があってはならない。「道」が求められているのだ。梅岩はこれを実践として現わすためには、まず売り先への誠実さがなければ、商人とはいえないといっている。そして同時に、「道」を実践するためには、倹約の精神と行動がなければならないと説いている。

商人は当然のことながら、このことは全ての者にも必要なことだと私も考える。

「梅岩は、“倹約の事を得心(とくしん)し、行ふときは、家ととのひ、国治まり、天下平（たいら）かなり。これ大道にあらずや。倹約といふは畢竟(ひっきょう一つまるところ)身を脩(おさ)め、家を

ととのへんためなり。大学に所謂（いわゆる）、天子より以(もっ)て庶人に至るまで、壱(いち)にこれ皆、身を脩むるを以て本(もと)とすと、身を脩むるに何ぞ士農工商のかはりあらん。身を脩る主（あるじ）となるは如何(いかん)、これ心なり”と記述している。

そしてこの倫理が、商人だけのものではないことを強調している。となると、すべての階級にとって、これらの考え方に基づく“経済性”と“合理性”の追求は、そのまま倫理性になり得る。というのは、ここに要請されるものは“自制”であり、それが社会秩序の基礎であると、彼は考えているからである」

７　石田梅岩から上杉鷹山へ

さらに七平氏の論説を見ていきたい。

彼は、正三から梅岩へと日本資本主義の原型が形成されていき、その延長線上に、これらと符合するがごとき典型的な例があると言った。

それが上杉鷹山であるととらえている。

七平氏はこの本の中の、多くのページを使って、鷹山の藩政改革の具体的な様子と、その実践の内容を分析している。

その上で彼は結論づけて次のようにまとめた。

「徳川時代とは、上は諸侯から下は庶民にまで、いや応なく経済を教え、“資本の論理”にしたがわない者は破滅することを、実地に教育した時代であった。と同時に、この“資本の論理”の上に、“資本の倫理”を樹立しなければ、その“資本の論理”自体が崩壊することを教えた時代なのである。

梅岩が説いたのが働く者の倫理なら、鷹山が残したものは経営者の倫理なのである。

この伝統は今も残っており、経済団体の会長が私財をたくわえず、航空会社の会長が陋屋（ろうおく―狭くて粗末な家）に住んでいると聞けば、日本人はそこに感動し、その人を信頼する。

特に一国の政治・経済と密接な関係のある企業、いわば昔の藩営企業ともいうべきものに携わる者には、それが要請されている。すなわち、“資本の論理”を厳密に実践しつつも、本人は無私・無欲であらねばならぬという倫理である。
　これはおそらく、かつてピューリタンが持っていた倫理とともに人類史において極めてユニークなものであろう」

　文中の「経済団体の会長が私財をたくわえず」といっているのは、旧・経団連の元・会長、土光敏夫氏のことである。また、「航空会社の会長が陋屋に住んでいる」とは、全日空の元・会長、若狭得治氏のことである。

　さて、七平氏がいっている「ピューリタンの倫理」とは、ドイツの社会学者、マックスウェーバーが、その著作「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」で述べていることを指している。
　ウェーバーは、西欧の近代資本主義を形成し、発展させてきた基盤となったものは、プロテスタンティズム、すなわち清教徒たちの思想であったというのである。それを概略的にいえば、さまざまな生活場面での禁欲的な姿勢と、合理性を求める意思が、勤労することへの意味づけとなり、大きな動機づけになったととらえているのだ。

　正三から梅岩につながり、そして鷹山に至るこの流れの中に、働くことへの意味づけが明確に存在している。まさに、ウェーバーがいうことと殆ど同じパターンをたどって、日本資本主義が形成されていることを、七平氏は論証していった。
　私は彼のこの洞察に、深く共感し敬服している。

（うえとこ　くにひろ）

―引用・参考文献―

■「代表的日本人」
内村鑑三著　鈴木俊郎訳　岩波書店
昭和62年（1987）　第43刷
■「武士道」
新渡戸稲造著　矢内原忠雄訳　岩波書店
昭和49年（1974）　第15刷改版
■「上杉鷹山に見る組織改革」
上床訓弘著　T・M・D・グループ
平成6年（1994）
■「水野忠辰の悲劇」
上床訓弘著
「私学経営」平成23年（2011）7月号
■「日本資本主義の精神」
山本七平著　光文社
昭和54年（1979）
■「上杉鷹山」
横山昭男著　吉川弘文館
昭和62年（1987）
■「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」
マックスウェーバー著　大塚久雄訳（改訳）岩波書店
平成元年（1989）
■「上杉鷹山の人間と生涯」
安彦孝次郎著　壮年社
昭和17年（1942）